

放射性鉱物鉱床とその探査

第三の火——文化の進歩にともなう新しいエネルギー源として、原子核のなかにひそむ力がはじめて開放されてから、早くも十年あまりの歳月が流れた。この間の自然科学の発展は、それまでのどんな時期にもまして目ざましく、原子力は、理論の研究に始まつて、実用化のための予備実験に至る長い階段を一気にかけるのぼつてきた。

放射性鉱物——18世紀に、チェッコのヨアヒムスタール鉱山でその最初のものが見出だされたが、真価の知られないままになっていたこの種の鉱石が、いまではかつての砂金以上の熱心さでさがし求められ、大陸での鉱床の開発速度は、いままでのどんな地下資源の場合よりも速かつたと言われている。乏しくなつたと伝え聞く石油や石炭に代わるものとして、いかに

多くの人たちのひとみが、放射能を持つ鉱物に注がれていることであろうか。



日本アルプスなど地形のけわしい地帯のウラン調査はエア・ボーンやカー・ボーンが行えないためにポケット・モニターと共に“マン・ボーン”が行われる(北アルプス・白馬槍岳)

この放射性鉱物のなかで、日本の地名にちなむ名をもつものが少なからず見られるように、この分野で戦前からつづけられてきた鉱物学者、化学者、民間研究家の努力があげた成果は大きく、戦後の核原料資源の研究もこれら先人の業績を基礎として出発した。

戦後十年の間、その前半にはこのような調査を行うすべもなかつたが、やつと状況の好転した1954年に、地質調査所は、国内のウラン・トリウム資源の組織的な調査の問題をとりあげ、ここに、積極的な活動を開始したのである。この特集では、なかでもいまま特に重点がおかれているウラン鉱床を主に、それをめぐる問題を考えてみたい。